

## Egg donation in Spain and Mexico.

### スペインとメキシコの卵子提供

Dr. Laura Perler

#### Q. 研究者としてのバックグラウンド、専門領域について教えてください。

修士課程で社会人類学とジェンダー研究を学んだ。生殖技術は、親族関係、政治的、社会的、不平等の問題、ジェンダーの問題など、たくさんの層を持っており、とても興味深いと感じた。この頃、代理出産を研究するためにメキシコに行くことを計画しているキャロライン・シュールに会った。自分は過去にメキシコに住んでいたこともあるので、メキシコで研究したいとも考えていた。研究では、最終的に卵子ドナー、特にその空間で、人種と階級の分岐に焦点を合わせることになった。

その後、スペインの卵子提供について研究をして博士号を取得した。現在、生殖の地政学(reproductive geopolitics)についてポスドクを終えたところ。

#### Q. これまでに行ったフィールドワークについて、教えてください。どのようにしてフィールドに入って行きましたか？難しい点がありましたか？

メキシコのクリニックにアクセスするのはとても簡単だった。しかし、自分自身がメキシコ人だったとしたら、そうではなかったかもしれないと考えている。海外から来た、白人研究者であることが、自分に門戸を開けてくれたように感じた。これは、おそらくこの国の植民地時代の歴史を反映しているだろう。フィールドワークでは、3か月にわたって集中的に追跡した3人の卵子提供者に焦点を合わせた。

スペインでは、参与観察を許可してくれるクリニックを見つけるのがかなり難しかった。クリニックは私立であり、医師に自分の仕事の人類的側面を理解してもらうのは難しかった。最終的に、バレンシアに受け入れを許可してくれるクリニックを見つけ、そこに10ヶ月滞在した。

以前にメキシコで研究を行ったことで、スペインでの研究の扉が開かれた可能性があると考えている。それにもかかわらず、スペインの医師とクリニックは、(生殖がビジネス化されている)米国の文脈から、そして不平等と搾取の問題を抱えたメキシコの文脈から非常に距離を置きたがった。「私たちは彼らとは違う」というメンタリティが顕著だった。

#### Q. スペインで行われている利他的な(“altruistic”)卵子提供のadvantageとdisadvantageについて教えてください。

スペインで行われている卵子提供は利他的なものではない。このフレーミングは、道徳的に受け入れられるようにするためのものであり、クリニックは、(匿名性に加えて)卵子提供を戦略的に売り込むためにそれを使用している。ドナーは実際、1回の提供で約1,000ユーロを稼ぐ。スペインでは若年失業率が高く、この人たちの平均給与は約1,000ユーロであることを考えると、卵子提供の補償はかなりの額だということになる。

経済的利益に加えて、卵子提供をやることで、定期的な婦人科検査と遺伝子検査を受けることができるのでメリットがあると述べた卵子ドナーもいた。

卵子提供を推進するために、フェミニストのメッセージがクリニックのソーシャルメディアキャンペーンに組み込まれている。スペインではフェミニスト運動が強力であり、効果的なマーケティングツールになっている。

Q. スペインのクリニックで、卵子ドナーはどのようにコントロール(品質管理)されていきましたか? メキシコのクリニックではどうでしたか?

スペインでの研究は、ドナーがどのように選ばれたかに焦点を当てた。クリニックは、「…人々は健康な赤ちゃんを産むためにここに来ている」と述べていた。卵子の品質を確保するために、ドナーはさまざまな方法でスクリーニングされる。婦人科検査によるコントロール(細菌検査など)、心理面接や心理テスト、性感染症の検査、遺伝的保因者スクリーニング(ターナー症候群、嚢胞性線維症など)。

スペインのある大きなクリニックは、子供が血友病で生まれたために訴えられた。クリニックが遺伝的保因者スクリーニングを導入したのはこの事件の後だった。

メキシコの卵子提供を研究する際には、ドナーの選択プロセスに焦点を当てていなかった。しかし、多くのメキシコ人医師がスペインでトレーニングを受けていることがわかったので、間違いなく知識の移転が行われている。メキシコでは、階級と人種により重点が置かれているため、ドナーの階層化が行われている。「VIPドナー」がいて、そのドナーを希望する場合、より多く支払わなければならない(VIPドナーのほとんどは、肌の色が白い人たちだ)。メキシコでは遺伝子スクリーニングはあまり重視されていない。

Q. スペインの卵子ドナーの vulnerability/precarity はどのような点に現れていますか?

遺伝子検査を取り巻く不確実性はたくさんある。ドナーは、スクリーニングを受ける前にインフォームドコンセントに

署名する必要があるが、臨床は非常に速いペースで進行しているため、女性たちは自分が署名する文書を読まないことがよくある。テストが完了した後の遺伝カウンセリングも多少なりともグレーな領域だ。女性に情報が伝えられることもあるが、伝えられないこともある。結果が直接ではなく郵送で提供されることもある。情報を完全に理解していないとドナーに不安を与える可能性があるため、これも理想的な方法ではない。

2つの主要なドナータイプを観察した。  
1) 時々提供する女性(例: 時により、お金が必要な学生)  
2) 複数のクリニックで定期的に提供する女性(例: 月に2~3回)。

スペインにはドナー登録はなく、女性が提供できる頻度(実質的に)制限はない。このこと自体に不安定性(*precarity*)があると考える。潜在的な健康問題もある。一般的に言って、自分がインタビューをしたドナーは、提供時に潜在的な副作用を認識していた。しかし、ホルモン刺激の長期的な副作用の可能性や、自分の将来の妊孕性にどのような影響があるかを認識していなかった。現時点では、このトピックに関する研究はほとんどない。

Q. メキシコの卵子ドナーの vulnerability/precarity はどのような点にあらわれていますか?

スペインとメキシコの状況は驚くほど似ていた。主な違いは、「マチスモ」(家父長制)がメキシコの女性の日常生活にはるかに多く存在することだった。人種や階級の違いも、メキシコでより大きな役割を果たしていた。

Q. 卵子ドナーや代理母が、クリニックについて情報を交換するような場所はありますか? 女性たちは、少しでも良い条

件・環境を得るためにどのように行動していましたか？

一つのアイデンティティを持つ組織化されたグループはない。代理母や卵子ドナーのフォローアップはほとんどなく、互いに繋がり合うことへの関心は低い。バルセロナを拠点とするスペイン人女性が卵子提供に関するジャーナリズムの本を出版したことを知っているが、Facebookグループがあるかどうかはわからない。

メキシコには、代理母のためのFacebookグループがあるが、卵子ドナーについてはそのようなグループはない。

**Q. マチスモという考え方は、メキシコの卵子提供や代理出産にどのような影響を与えていますか？**

メキシコの卵子ドナーの生殖をめぐる伝記は、彼らが生きている家父長制の文脈と絡み合っている。たとえば、過去に何度もレイプされた困難なライフストーリーを持つドナーがいた。彼女は子供たちに良い人生を与えなかったため、卵子を提供した。彼女の過酷な過去を比べて、卵子提供のプロセスは彼女にとって比較的簡単だった。彼女は、自分の子供を出産するときに分娩中に泣いたことで医師が彼女を叱った事件を思い出した。これは、人種や階級、そして誰がそれを「すべき」か「すべきでない」かを再生産する、社会的アイデアを物語っている。

依頼親とはほとんど接触しなかった。メキシコの医師たちは、カトリック教会は、その慣習にそれほど反対していないと言っていた。家族を持つことが最重要であり、その家族がどうやって形成されたかは重要ではないからだ、と言っていた。

**Q. 生殖ツーリズムの渡航先として、メキシコの advantage としてどのような点があ**

りますか？ スペインなど旧宗主国からの利用者が多いですか。南米は今後、生殖ツーリズムのハブになるでしょうか？

自分が研究を行っていた当時、メキシコはまさに生殖ツーリズムの人気スポットだった。ポランコにはハブがあったが、後にそれは違法になった。それまでは、スペインから大勢の同性愛者のカップルが渡航して、代理出産を依頼していた。それは、スペインからみてメキシコは旧植民地だったというつながりがあるため。

**Q. ローカルのメキシコ人の不妊カップルの間で、体外受精や third party reproduction はどのくらい受け入れられていますか？**

このトピックは研究していなかった。自分がメキシコシティで話をした医師は、ほとんどのクリニックは高価な都市部にあり、裕福な白人を対象としていると言っていた。

メキシコの地方では、不妊手術 (sterilization) の方が一般的だ。それは、メキシコ社会での人種と階級の関係、そして誰が生殖を許可されているかを反映している。

**Q. ゲイカップルが代理出産で子供をつくることについて、ローカルのメキシコ人はどのような考えを持っていますか？**

確実なことはわからない。メキシコではホモフォビアが問題になっており、多くの人が同性愛に反対しても驚かない。しかし、フェミニスト運動が強く、都市では、これらの人々の間で代理出産は支持されている。

それとは対照的に、スペインでは、カトリックの国であるにもかかわらず、状況は非常にリベラル。フランコ政権が崩壊した後、社会は急速に開放され、LGBTIQの問題に関して驚くほどリベラルになっている。たとえば、レズビアンのカップルが子供と一緒にいるのを見るのは普通のこと。

**Q. メキシコで、代理母は、依頼者や子供との交流を望んでいましたか？ 卵子ドナーや代理母と交流を続ける依頼者はいましたか？**

卵子提供に関しては、メキシコの文脈では匿名性はそれほど重要ではない。米国と同様に、卵子ドナーの写真がカタログなどに掲載されている場合がある。対照的に、スペインでは厳格に管理されており、匿名の卵子ドナーを求める多くの海外からの顧客を魅了している。

**Q. メキシコで利他的な代理出産として、親族間で代理出産が行われるケースは多いと考えられますか？**

メキシコのクリニックで研究を行っているときに、姉妹の卵子を使いたいと思っているカップルを見た。しかし、これが一般的なことであるかどうか、わからない。メキシコでは、メイドの卵子を使って子供を妊娠する裕福な家族の話がよく知られているので、そのことを「家族の中に」しまっておくという考えは、おなじみの物語だと言える。

**Q. メキシコのフェミニストや人権団体は代理出産や third party reproduction について発言していますか？**

想像できることだが、フェミニストの間でも分裂がある。非常にリベラルで、女性の選択権を支持する人もいれば、反対する人もいる。

**Q. その他**

スペインでは、遺伝子検査の問題は非常に興味深い。生殖補助医療と選別の境界線は、卵子提供によって曖昧になっている。健康な赤ちゃんを産むというクリニックの目的は理解できるが、これが技術化され、多くの可能性を孕んだ環境で市場化されることで何が起るのか？ これは非常に興味深い領域だと思う。

自分の同僚が、クリニックでの卵子提供について、レストランの譬え話を使って述べていたのを思い出す。あなたがレストランに出席し、最高のテーブル、最高の料理、最高のワイン、または単に平均的なものから選択できる場合、もちろん人々は最高のものを望むだろう。

依頼親は当然のことながらリスクを嫌っており、クリニックは健康な子供を「保証」するためにますます多くの選択肢を提供している。クリニックは、これらの選択肢を提供することで、新しい倫理と責任に直面している。これらの技術の進化に関する将来のビジョンは確かに興味深いものだ。しかしそれと同時に、社会はこれらをコントロールの元に置いており、全く新しい身体を生み出しているわけではない。これらの選択に伴う健常者優先主義(ableism)にハイライトを当てることが重要だ。

メキシコは、スペインのような他の国々では承認されていない新技術や実験研究の「試験場」にされている。規制が緩いから。

**Q. 今後やりたい研究は？**

生殖地政学に関する新しいプロジェクトを始めようとしているところ。生殖がどのように統治され、周辺化されたグループによって行使されるか、そして周辺化されたグループがそれらの統治戦略にどのように遭遇し、それを経験するかに焦点を当てる。このプロジェクトは、他に2人の研究者との共同研究で実施す

る。1人はモロッコからの移民農業労働者に焦点を当て、もう1人はメキシコの先住民女性の強制不妊手術に焦点を当てる。自分は、スイスの亡命希望者の女性に焦点を当てて、保護施設において彼女たちが何を経験し、自らの生殖能力についてどのように交渉するかを考察する。また、アーティストたちと協力して、最後に展覧会を開催し、アートを通じて研究成果を社会に発信する予定。

(2022年5月)

Dr. Laura Perler [Link](#)

ベルン大学で社会人類学とジェンダー研究の修士号を取得。ザンクトガレン大学で、スペインの国境を越えた卵子提供とリプロジェネティクスを扱った。2018年から社会文化地理学ベルンで働いている。

研究対象は、生殖、生物経済、フェミニストテクノサイエンス、移住、ケアワーク、および一般的なフェミニストおよびポストコロニアル理論。

論文:

Perler, Laura and Schurr, Carolin 2020 Intimate Lives in the Global Bioeconomy: Reproductive Biographies of Mexican Egg Donors. *Body & Society*.

<https://doi.org/10.1177/1357034X20936326>

Molas, Anna and Perler, Laura 2020 Selecting women, taming bodies? Body ontologies in egg donation practices in Spain. *Tapuya: Latin American Science, Technology and Society Special Issue*.

Schurr, Carolin and Perler, Laura 2015 Trafficked into a better future: Why Mexico needs to regulate its surrogacy industry (and not ban it). Published online on open Democracy.